

内的日記の生成と展開

——18-19世紀フランスにおける内面性と社会性との交錯——

葛山 泰央

従来、西欧における日記記述の歴史的展開は、その「告解的性格」や「自己認識」の働きとの関連で問題化され、18世紀後半に姿を現す‘内的日記’は、専ら内面性に依拠する形式として了解されてきた。しかしその〈内的〉性格は、内的領域と外的領域とを相互に転換させ、内面性と親密性との連繋を形作るものである。それ故、日記記述の近代性は、内面性への転回ではなく、内面性と社会性との交錯として理解されねばならない。

本稿では、18-19世紀のフランスにおける日記的な書記（行為）を検討する中で、この歴史的・社会的交錯の持つ意味を考察する。最初に、感性の歴史学における内的日記の資料的価値を巡る議論を批判的に検討する中で、「現実の表象」や「主観性のエクリチュール」としての日記の性格規定が、日記的な書記行為における「現実の審級」や「指示対象の審級」、更には、それ自体の産み出す「現実効果」に曖昧に依拠した事の帰結である可能性を示唆し、日記的な書記（行為）における宛先や「言説の審級」を問題化する事の必要性を論じる。

ルソーの著作における自己探求と夢想との関連性は、書記の書記行為からの逸脱の問題を浮かび上がらせる。夢想そのものである書記は、書記行為の行為性・身体性からの離脱、即ち、社交性からの離脱を通じて、孤独の状態に到達する。但し、日記的な書記（行為）がその逸脱的展開の果てに到達するこの孤独は、「真正なる共同社会」を創出するための、いわば社会性の〈零度〉として、それ自体積極的な意義を与えられる事になる。

19世紀の内的日記は「その日その日の自画像を描き出す」形で内面性の空間を保存しているが、同時に他者からの介入可能性を招き寄せている。‘自分自身との対話’や‘日記との対話’の中で、擬似的な友愛関係や性愛関係が構築され、更には、交換日記としての性格や日記それ自体の‘出版’の意義が増大する中で、一種の‘秘密結社的’共同性が創出される。かくして日記的な書記（行為）の近代性は、それが「自己のエクリチュール」や「内面性のエクリチュール」であるまさにその中で、共同性や社会性の幻想を投射し保持する事に求められる。

歴史記述の古典古代的な形態である日記的
‘年代記’や‘回想録’的記録にみられる自己

観察から、中世における‘心情の吐露’や‘信仰告白’、ルネサンス以降に登場する‘自己自身との対話’、敬虔主義やロマン主義の時代における、心理学的・道徳的自己暴露を旨とした‘内的日記’を経て、超個人主義的であると

時に時代批判的である『『近現代』の日記』に至るまで、西欧における日記記述 Tagebuchschreibenの「伝統」とその歴史的展開は、専ら「自己を人格的に向上させる意味での人格・個人の措定」と「自己観察や自己解釈に対する意味賦与としての自己認識」をその「基本的動機」とするものとして了解されてきた。日記を記述する事は、多かれ少なかれ、「(何らかの危機的・運命的な状況下で) 自己の内面性や道徳性を追求するような自己認識の努力」との関連で把握され、特に「自己告解Sich-selbst-Beichten」や「告解的性格Beicht-Charakter」は「‘真の’日記記述の最も強力な動機の一つ」と見做されてきたのである（[Hocke; 1963= 1991: 23-24]）。

フランスにおける日記的な書記（行為）の近代性もまた、この「個人的・告白的性格」との関連で把握されてきたと言える。特に18世紀の後半から姿を現し始めた‘内的日記les journaux intimes’は、それ以前から続いてきた‘旅日記（旅行記）le journal de voyage (ou le carnet de route)’や‘年代記作者たちmémorialists’による「年代記的日記le journal-distraktion, chronique」が「何らかの重大事件や戦争、冒険や旅行、各人の与えられた境遇から読み取られた日常生活の細部」を書き記してきたのとは対照的に、専ら「私的・個人的生活の領域における精確な認識」を目指すもの、「自己認識la connaissance de soi」に向けての分析的努力を行う様式（[Gusdorf; 1948:38-39]）としての意義を与えられ、またそのようなものとして了解されてきたのである。

しかしながら、「外的日記le journal externe／内的日記」というこの区別（[Gusdorf; op.cit.: 39-42]）、「他者を『外的』、書き手の自己意識を『内的』」と見做すこの区別は、「自他の関係に関する現代的な概念」には最早合致しない。

なぜならば「自我とは、最早捉え難い実体ではなく、他者に向ける視線であると同時に、他者から向けられる視線を自覚する事である」からだ。従って『『外的日記／内的日記』という区別は、それ自体としては脆弱なもの』である。むしろ‘内的日記’こそが、『『外』から『内』への、『内』から『外』への絶えざる移行』を繰り返す事になるからである（[Didier; 1976= 1987:35]）。此处で差当たり、日記的な書記（行為）の近代性を、‘内面性への転換’にではなく、「内的」領域と「外的」領域との相互転換に求める事が出来るかも知れない。実際に、19世紀における‘内的日記’は「個人の私的空間、私生活と自分自身について書き記す事との関係——19世紀に入念に作り上げられ、次第に変化していく関係——を明らかにするものであると同時に、他者への視線でもあり、他者の視線を自覚する事でもある」（[Vincent-Buffault; 1986=1994:186]）。即ち、それは「個人の私的空間」や「私生活と自分自身について書き記す事との関係」に対する自己観察としての意味を持つと同時に、他者との日常的な関係性、他者への視線や他者の視線（の痕跡）としての意味を併せ持つ。つまり、この書記（行為）の中では、自己の‘私生活・内面的生活vie intime’に対する視線と他者との‘親密な関係relations intimes’に対する視線とが互いに不可分な形で混在しているのである。

このように、‘内的日記’に象徴される近代の日記的な書記（行為）の空間は、内面性が社会性との間に曖昧で錯綜した関係を取り結ぶような場を提供してきたと言える。‘私性intimité’という語彙の両義性、即ち、‘内面性’と‘親密性’という両義性もまた、この事に対応しているのかも知れない。しかもそこで「書記行為の主体」は「言語活動に先立ち言語活動とは無

関係に形成された『内面性』の担い手としてではなく、「書記（行為）と共に構成され実現され作用されるような主体」として、あるいは「書記（行為）を通じて自分自身に作用し続ける、書記（行為）そのものの担い手」([Barthes; 1966=1984:29, 33])として姿を現す事になるだろう。

本稿が‘内的日記’の歴史的・社会的な考察を通じて明らかにしたいと思うのは、日記的な書記（行為）の場における内面性と社会性との交錯であり、この場で「書記行為の主体」が壊乱される事によって、書記（行為）の担い手が書記（行為）そのものの中で占める事になるであろう、新たな位置の可能性である。

II

そこで先ず初めに、‘感性の歴史学’([Corbin; 1991=1993])における「内的日記」の資料的価値を巡る議論を批判的に検討する中で、問題の所在を明らかにする事にしたい⁽¹⁾。そこでは、近年の社会史的研究の立場から、この種の日記的な書記（行為）の性格に関する、一定の歴史的・社会的な考察が行われており、それ故、そこでの議論を批判的に検討する事は、日記的な書記（行為）が‘歴史的・社会的現実’との間にいかなる関係を取り結ぶのかという事や、それが‘歴史的・社会的文脈’との間でいかなる特性を賦与され、またいかなる効果を発揮し得るのかという事を、改めて問題にする事に繋がるからである。

アラン・コルバンは「歴史学と感覚の人類学」(1990)と題された論考の中で、「感覚の歴史人類学」的探究の立場から、「自己のエクリチュール*l'écriture de soi*」、特に「内的日記」の資料的価値に対して検討を加えている。内的日記

(のジャンル)に関する先行研究([Girard; 1963][Didier; op. cit.]等)を参照しながら、彼は次のような問題点を指摘する。まず第一に、内的日記は「社会的に限定された実践」である。19世紀において、内的日記を書き記す実践は、パリ以上に地方に関係するものであり、‘プチ・ブルジョワ’の最大の関心事(の一つ)であり、更には、様々な困難に直面する中で「内面性のエクリチュール*l'écriture intime*」以外の方法では自己を表現する事の出来ない人々がしばしば内的日記に興味関心を示した(日記を書き記した者の中に「女性」や「同性愛者」の割合が高いのはそのためであるとされる)。第二に、内的日記に表現された「自己の内面に対する感受性の鋭敏さや、感じられるものと知覚されないものとの間の分割線」は「[記述者の]帰属集団」に応じて大きく変化する。そして第三に、「自己の詳細な記録であると共に、身体の衰弱に対して注意深いまなざしを向けるこのエクリチュール [=内的日記]は、たとえそれが出版を目的として歪曲されたものでない場合でも、実際には短期間しか続かないものである」([Corbin; op. cit.:274]⁽²⁾。

このように、歴史的資料としての内的日記は様々な問題点を抱え込むものとされるが、一般的には、18世紀以来、「家事日記*les livres de raison*」や「宗教的日記*les journaux spirituels*」に取って代わるものとして次第に姿を現してきたのであり、そのようにして「世俗化」を遂げた「自己の検討*l'examen de soi*」は、歴史家に対して、自己による自己自身の精確な分析を提供し得るものとして評価されるのである。別の言い方をすれば、内的日記は「増大する繊細さや内省や(…)社会的葛藤の中で与えられる苦痛に対する新たな感じ易さの過程」を探るための資料として、一般的には「感情装置の歴史性

l'historicité des dispositifs affectifsを認識し、情動システムの布置や機能を特定し、更には感覚の訓練様式や活用様式を識別しようとする」[Corbin; op.cit.: 275] 際の資料として役立ち得るとされるのである(3)。

このように、感性の歴史学は、「内的日記」を感受性を巡る歴史的資料として取り扱う中で、日記的な書記(行為)の担い手であると同時に感受性そのものの台座でもある「歴史的個体」を概念的に再構成しようとする。しかしながら、それが「内的日記」に対して賦与する資料特性——即ち‘分布の社会的限定性’と‘帰属集団による拘束性’と‘短期間の持続性’——は、先取された概念的準拠枠・分析的範疇としての「内的日記(ジャンル)」から導き出されたもの、遡及的に投射されたものに他ならない。なぜならば、この準拠枠や範疇は、常に既に、これらの資料特性に関する予期、ジャンル相関的な‘期待の地平’を含み込む形で成立するものであるからだ(4)。しかも「内的日記」というこの準拠枠や範疇が実定的である限り、感受性と書記(行為)との相互作用、書記の書記行為に対する従属、書記行為の線形的な時間性に対する従属といった事態は問題にし得ない。というのも、「現実の審級l'instance de la réalité」や「指示対象の審級l'instance du référent」という神話的前提([Barthes; op.cit.:33])、書記行為の産み出す現実効果l'effet de réel([Barthes; 1967=1984] [1968=1984])に依拠する中で「内的日記」(の性格規定)を自明視する態度が、これらの事態を追認してしまう可能性があるからだ。従って、日記的な書記行為のア・プリオリな性格規定それ自体を問題にしない限り、またその事を通じて、感受性と書記(行為)との相互作用([Marshall;1988])や、書記行為に対する書記そのものの脱中心化

([Barthes; 1966=1984])を問題にしない限り、感性の歴史学もまた、書記を書記行為に従属させ、書記行為を線形的な時間性(あるいはその‘分布’を限定したり、その‘帰属集団’を指定したりする‘歴史的・社会的文脈’)に従属させてしまう危険性を免れる事が出来ないのではないか。

このような一種の遡及的幻想を回避するためにも、此处では、日記的な書記(行為)の運動そのものを問題にしなければならない。換言すれば、日記的な書記(行為)における言説の審級l'instance du discoursの問題、書記(行為)における書記(行為)そのものの担い手の位置の問題([Barthes; op.cit.])を、線形的な時間性からの書記(行為)の逸脱、書記行為からの書記そのものの逸脱、親密性・内面性と「内的日記」との間にみられる社会性と書記(行為)との相互作用、といった出来事との関連から検討しなければならないのである。

日記的な書記行為のジャンル特性を自明視する態度がこれまで十分に問題にし得なかったのは、例えば次の事である。即ち、日記的な書記(行為)は、感受性(あるいはそれをコード化する‘歴史的・社会的文脈’)の痕跡以上のものである、という事がそれだ。先にも示唆しておいたように、日記的な書記(行為)は、ジャンルの内部で賦与される特性——書記の書記行為(の行為性や身体性)に対する従属、書記行為の線形的な時間性に対する従属——をしばしば逸脱する形で展開し得るのであり、従ってこの逸脱的な展開の中に、書記行為から脱中心化する書記そのものの運動、社会性と書記(行為)との相互作用といった事柄を読み込むべきなのである。

宛先destinataireの問題を考えてみよう。日記的な書記(行為)には宛先が含まれている。そ

れは‘何処から何処へ向けて書き記されるのか’
という形で運動の方向性、展開の方向性を伴う。
実際に、「内的日記」だけに限定した場合でも、
その宛先には、「自己完結的な宛先autodestination」
「擬似的な宛先pseudo-destination [内的/外的]」
「限定された開示 [私的な宛先=潜在的な読
者/私的な読者=非宛先/対関係]」「最大限の
開示 [=出版]」といった複数の類型が在り得
る ([Rousset; 1983: 442])。日記的な書記 (行
為) はそれ自体が宛先を規定し得るものであり、
また、その書記 (行為) そのものがこの宛先と
の関係で逆規定され得るものである。従って書
記 (行為) がいかなる宛先を想定しているのか、
‘何処から何処へ向けて書き記されるのか’、と
いう事だけでなく、この宛先との関係で書記
(行為) そのものがいかなる変貌を遂げ得るの
か、書記 (行為) そのものの性格がいかに変化
し得るのか、という事をも併せて問題にしなけ
ればならない。別の言い方をすれば、日記的な
書記 (行為) における宛先、即ち、それが‘何
処から何処に向けて’書き記されたものである
のかを問題にする場合に、この‘何処から何処
に向けて’という方向性は、それ自体としてみ
れば、想像的な次元を含み込むに違いない。こ
のように、日記的な書記 (行為) は、書記行為
として展開される事もあれば、書記行為の行為
性=「身体」性から離脱して書記そのものとし
て展開される事もある。従来の見方は、ジャン
ルの相関項としての書記行為の存在、「主観
性のエクリチュール」 ([Barthes; op.cit.:32-33])
の存在をア・プリオリに前提としてきたが、本
稿では、日記的な書記 (行為) における言説の
審級、書記 (行為) における書記 (行為) その
ものの担い手の位置に注目しながら、書記 (行
為) が‘何処から何処に向けて’展開されるの
か、いかなる想像的な次元を含み込む形で、い

かなる感受性や社会性の痕跡を留める形で、更
には、いかなる感受性や社会性を創出する形で
書き記されるのか、を問題にしてみたいのであ
る。

日記を‘線形的な時間性に従属した書記行為’
として把握する事自体、ジャンルの予期地平の
内部で為される事である。しかしながら、日記
的な書記 (行為) はそうした予期地平 (あるい
はその内部で‘定義’という形で与えられる諸
特性) に対して逸脱的に展開し得るものである。
繰り返せば、日記的な書記 (行為) は、書記行
為から書記そのものを脱中心化させる形で、社
会性と書記との相互作用を引き起こす形で、逸
脱的に展開し得るものである。そこで以下では、
この逸脱的な展開の実際を、18・19世紀フラン
スにおける日記的な書記 (行為) を検討する中
で明らかにする事にしたい。日記的な書記 (行
為) の運動そのものを取り出す事、書記行為に
対する書記そのものの分散性、書記 (行為) の
分散性と感受性や社会性の形態との関連をそれ
ぞれ探る事が目指されるはずである。

III

ジャン=ジャック・ルソーの『孤独な散歩者
の夢想』(1782) (以下、『夢想』と略記) は、
「私の夢想からなる不定形な日記un informe
journal de mes rêveries」として構想されている。
そこには同時代の日記と同じく、それぞれの
「散歩」に即した形で断片的な「夢想」が綴ら
れているのだが、日記の書記行為が備える特徴、
特に(日付に象徴される)線形的な時間性は背
景化される(精確には、‘書記行為’の線形的
な性格が「身体」と共に括弧入れされる、と言
うべきかも知れない)。此処で注目したいのは、
この「夢想」が書記行為との間に取り結ぶ関連

性であり、それが書記行為を想像的な社会性、虚構化された社会性の創出にまで導くその様である。

ルソーは『夢想』を執筆した動機について、次のように述べている。

「日日の散歩mes promenades journalièreの途上、〔何物にも煩わされない心は〕しばしばうっとりするような思いcontemplations charmentesに満たされる事が在ったが、これまではその思い出を失ってしまった事を私は残念に思っている。これからは心に浮かんでくる事を私は書き留めておくfixer par écriture事にしよう。それを読み返してみる度に、私は楽しい思い出に帰る事が出来るし、私の心が当然受けるはずであった報いを考える中で、不幸を忘れ、敵を忘れ、汚辱を忘れる事が出来るだろう」〔Rousseau; 1782→1959=1960:18〕。

『夢想』は、「日日の散歩」を時折満たす「うっとりするような思い」や「心に浮かんで来る事」を「書き留めておく事」を目指す。此処で「心に浮かんでくる事を書き留めておく」とは、「孤独な散歩者」を満たす「夢想」を、書記行為によって固定化させる事、定着させる事を意味する。注目すべきは、「夢想」の運動が書記行為の運動に重ね合わされている事である。しかし、それは必ずしも「夢想」が書記行為の中に回収される事を意味しない。「夢想」を（日記的な）書記行為に関連付ける事は、むしろ（日記的な）書記行為そのものに「夢想rêverie」としての性格、その逸脱的な性格を与える事になるからである。そもそも「夢想するrêver」とは「自分の外へ、自分の気質の外へ出る事、既定の路線から外れる事、正道を踏み外す事、常軌を逸するextravaguer事」を意味する

のであり、「rêverする人間、快樂のおもむくままに放浪する人間の中では、放縦libertinageの要素、更には乱痴気騒ぎの要素までもが作用している。rêverする者は自己を放擲する者なのである」〔Raymond;1970=1990:152〕。換言すれば、「夢想する」とは、「放浪する事」や「ぶらぶらする事」の中で「自分自身を忘れながら自分自身を見出す事」、「起源への、自然への奇妙な回帰」と同一視されている〔ibid.〕。つまり、『夢想』における（日記的な）書記行為は、「常軌を逸する」「自己を放擲する」という意味での「夢想」と結び付けられる中で、その逸脱的な性格を与えられる事になったのである。此処で問題にしたいのは、（日記的な）書記行為のこの逸脱的な性格が何処から何処に向けられたものであるのかという事であり、また、それがいかなる内面性や社会性の創出と結び付いていたのかという事である。「夢想」=書記行為の「常軌を逸する」運動は何処から何処に向けられたものであり、「自己を放擲する事」はいかなる内面性や社会性の創出をその代償としていたのだろうか⁽⁵⁾。

ルソーは『夢想』に対して、『告白』（1766-70）という「厳格で誠実な〔自己の〕検討」の継続作業——即ち、「自分自身を研究する事」「自分の魂と語り合う〔=会話する〕converser avec moi楽しみ」「自分の内面的諸傾向について反省する事」の継続作業——としての意義を与える。しかし、それにはもう『告白』という表題を付ける必要がない。ルソーはその理由を次のように述べている。

「現世的な愛着が全て心から奪い去られているのに、今更何を告白する事があるのか。私は賞賛される事もないが、非難される事もない。私はこれからは人間たちの中では無に等しい。

彼等とは現実の関係de relation réelle、真実の交渉 [= 社交] de véritable sociétéを持たないのであるから、私はそれ以上の何者でも有り得ない。どんな善を行ったところで、全ては悪に変わってしまうし、どう振る舞ったところで、結局は、他人にあるいは自分に害を与えるばかりなのだから、何もしないでいる事が私の唯一の義務となっている。だから私は、自分に出来る限りはその義務を果たす事にしよう」([Rousseau; op. cit.: 19])。

【夢想】は、「現世的な愛着」から自己を無関連化させる事を目指すものであるから、そこでは最早「告白する」必要はない、「告白する事」の結果として「賞賛される事」もなければ「非難される事」もない、という訳である。ルソーは「人間たち」との間には「現実の関係」や「真実の交渉」を持たない——後にみるように、これらの「現実の関係」や「真実の交渉」は、「人間たち」との間の関係から切り離され、想像的な次元に向けて転位される（あるいは、ゼロ記号化される）中で、虚構化された社会を出現させる——のであるから、「彼等」の間では「無」以上の何者でも有り得ず、従って「何もしないでいる事」を自分自身の義務と見做す事になる。但し、この「何もしないでいる事 m'abstenir」とは、単なる無為を意味しない。それは「自制する事」や「節制する事」という禁欲的な含意を伴うからであり、従って自己自身に対する自制的・禁欲abstinence的な関係を構築する事を目指すものであるからだ ([Bretonneau; 1977])。「しかし、そのように身体は何もしないでいるce désœuvrement du corpsにしても、魂はまだ生き生きとして、感情や思想を産み出す事を止めないし、道徳的・内面的な生活は、現世的・一時的な利害が完全に消滅

する事によってかえって増大しているように思われる。私の身体は、最早私自身にとって邪魔物であり障害物であるに過ぎない。それ故、これからは私は出来る限り、私を私の身体から解き放つ事にしよう」([ibid.])。此処では、「身体」を無為 [= 営為の不在] の状態に置く事によって「道徳的・内面的な生活」の意義を増大させる事が目指される。そのためには、「私を私の身体から解き放つ事」が必要になる。この「解き放つme dégager」とは「(困難や制約からの) 逸脱dégagement」を意味する言葉であるが、此処では、「邪魔物」であり「障害物」である「私の身体」から「私を解き放つ事」に託された形で、「身体」(を台座とする書記行為)からの、書記そのものの逸脱が示唆されている事に注目すべきであろう。「私を私自身から解き放つ」とは、「夢想」の書記を(日記的な)書記行為の線形性から解き放つ事、換言すれば、書記を書記行為の行為性 = 「身体」性から解き放つ事、書記を書記行為の台座である「身体」から遊離させる中で、書記そのものの逸脱的な性格を発揮させる事、を意味するのではないだろうか。

「夢想」=書記の逸脱的な展開は、個性性の忘却、自分自身の忘却にまで行き着く。「個体的なもの、私の身体の利害に繋がるものは、何一つとして私の魂を本当に満たす事は出来ない。私がこの上なく心地良い仕方でも物思いに沈み、夢想するのは、自分自身を忘れる時 m'oublier moi-mêmeだけなのだ。いわば万物の体系の中に溶け込み、自然の全体と同化する時に、私は言い表し難い陶醉を感じ、恍惚を覚える」([Rousseau; op.cit.:115])。そして、この逸脱的な運動が(最終的に)到達するのは、「現世的な幸福」や「公衆の幸福」からは区別された「自分一人の至福」の空間、「人々との交際

〔＝社交〕からは分離された「非社交的な孤独」の空間である。「人々が私の同胞〔＝朋友〕であった間は、私は現世的な幸福を思い描いていた。その計画は常に全体に関係するものであったので、私は公衆の幸福la félicité publiqueが無ければ幸福にはなれなかった。自分一人の至福un bonheur particulierという観念が初めて私の心に浮かんできたのは、同胞〔＝朋友〕がひたすら私の不幸のうちに彼等の幸福を求めている事が解ってきてからである。(…) こうして私は孤独な人間に、彼等の言葉を借りれば、交際嫌いあるいは人間嫌いになった。背信と憎悪にのみ養われている意地悪な人々の社会よりも、この上なく非社交的な孤独la plus sauvage solitudeの方が自分には好ましく思われたからである」([ibid.])。但し、この「非社交的な孤独」は‘自分を自分自身の中に完全に閉じ込めてしまう事’を意味しない。むしろそれは、自分自身の「感情」や「存在」を「他の存在者」に向けて拡張しようとする運動を引き起こすものであるからだ。「にもかかわらず私は、私を私自身の中に完全に閉じ込めてしまう事が出来ない。というのも、溢れ出る私の魂mon âme expansiveが、その感情や存在を他の存在者の上に拡張しようとするからである」([Rousseau; op.cit.: 116])。

要するに、『夢想』を通じて追求された「非社交的な孤独」とは、「現実の関係」や「真実の交渉」から完全に撤退する事ではなく、むしろそれらを徹底的に追求する事を意味していたのではないか。‘真の社会性’や‘親密性の理想的な形態’を創出し得るゼロ地点を確保するためにこそ(尤も、これらの表現自体が、そこに向けて様々な意味が備給される一種の‘空箱’＝ゼロ記号である)、自分自身や「他の存在」をそれらに向けて転回させるためにこそ、

自分自身を「人間たち」の空間や「社交性」の空間から分離させる操作が必要だったのではないか。換言すれば、「現実の関係」や「真の交渉」——即ち、「真正なる共同社会」[Cassirer; 1932=1974→1997]——に到達するためには、自分自身を「人間たち」の空間や「社交性」の空間からは分離された、純粋な存在(者)、一種のゼロ記号に仕立て上げなければならなかったのではないか。

IV

これまで見てきたように、ルソーの『夢想』における日記的な書記(行為)は、その逸脱的な性格を通じて、‘真の社会性’や‘親密性の理想的な形態’を創出し得るための回路を用意していた。日記的な書記(行為)は、その線形的な性格に拘束される事なく、むしろ書記が書記行為の行為性＝「身体」性から解き放たれ得る瞬間、書記行為の台座である「身体」から遊離し得る瞬間に、「現実の関係」や「真の交渉」の源泉を見出そうとした。つまり、書記の書記行為に対する脱中心化は、「真正なる共同社会」を創出するための可能性の条件に他ならなかったのである。

ところが、19世紀における「内的日記journal intime」の空間においては、日記的な書記行為の線形的な性格、書記行為の行為性や「身体」性、特にそれを拘束する線形的な時間性が否応無く意識される事になる。即ち、そこでは線形的な時間性(カレンダー)を尊重する事こそが「日記の署名する契約」を形作り、日記的な書記行為を構成すると同時に保護するものとなるのである。「日記を書くとは、日常的な『その日その日』の保護下に一時的に身を置き、書くという行為をこの保護下に置く事を意味する訳

だが、それはまた、書くという行為を、世間の人々がそれを脅かさない事を約束している、あの幸福な規律に従わせる事によって、この行為そのものから身を守る事を意味する。この時、書かれたものは、否応無しに、日常的なものの中に、日常的なものが局所的に限定させた視座の中に、その根を下ろす事になる。最も遠くさ迷い出た、最も常軌を逸した思想でさえも、日常生活の環の中に保持される事になるのであり、決して日常生活の真理性を傷つける事にはならない。それ故、日記にとって、誠実性とは、到達しなければならないが決して乗り越えてはならない要請を意味する事になる」(Blanchot; 1959=1989:263) 強調は引用者)。このように、日記の書記行為は、書記(行為)を、線形的な時間性(カレンダー)の遵守という「幸福な規律」に従わせる事によって、書記(行為)そのものの逸脱的な性格、あるいはそれが体現する「最も遠くさ迷い出た、最も常軌を逸した思想」から「身を守る事」を意味するようになる。書記行為やそれが体現する思想は、「日常的なものが局所的に限定させた視座」の中に留め置かれ、「日常生活の環」の中に保持されるのであり、決して「日常生活の真理性」を解除する事は出来ないのである(6)。このように、日記的な書記行為が線形的な時間性を遵守する事(Corbin; op.cit.:13-29)はそれを19世紀における「時間の誕生」との関連で問題化している)は、いわば書記行為からの書記そのものの逸脱を予め禁止させるような、あるいは予め局在化させるような事態であると言えるのではないか。とすればそこでは、書記の書記行為からの脱中心化を通じて‘真の社会性’や‘親密性の理想的な形態’を創出する事そのものが予め制限されているようにも思える(7)。

しかしながら、19世紀における内的日記は、

多くの場合に「内面的生活の日記」としての性格を持つと同時に、「家族関係や友人関係や社会関係の年代記」としての性格を併せ持つ、いわば重層的な書記(行為)として把握されていた。実際に、19世紀のブルジョワ・カトリックの子女たちの間では、しばしば内的日記を付ける事が奨励されたのだが、それらの日記的な書記(行為)は、ブルジョワ的な規範に照らせば「(世俗)道徳的な教導direction morale」としての意味を、教会の規範に照らせば「良心の検討l'examen de conscience」としての意味を、そして書記(行為)そのもの担い手である子女たちからはしばしば「(自己の自己自身に対する関係や自己と親密な他者たちとの間の関係に対する反省を伴う)自己の認識connaissance de soiあるいは想像的な交通communication」としての意味を与えられる事になったのである([Lejeune; 1993b])。即ち、日記的な書記(行為)は、様々な規範や認識枠組みとの関連で、重層的な機能を果たし得たのであり、その事は「ただ自分だけのために付ける日記」の中に「第三者」が介入する事態を避けたいと願う——それはまさに日記的な書記(行為)が絶えずそのような介入の可能性を用意しているからだが——次の記述からも読み取る事が出来るはずである。

「もし私が〔これからもこのように〕日記を付けるのであれば、私はそれをただ自分だけのためにpour moi seule、しかもそこにまさしく私の考える事だけを書き記すために付けたいと思う。たとえママでさえも、私がそれを付けている事は知らない〔のでなければならぬ〕。というのも、〔もし私が日記を付けていることを知ったら〕彼女はそれを読みたいと思うだろうし、そうなればこの日記は、最早お決まりの義務un devoir de styleに過ぎなくなってしまうだ

ろうし、決して秘密の話を打ち明ける相手 *un confident* ではなくてしまうだろう。否、[自分以外の] 誰一人としてそれを見てはならないのだ。私はずっと後になってからそれを読み直すという目的のためだけにそれを付けているのだから、それ [=日記] と私との間には、いかなる第三者 *tiers* にも割り込んで欲しくないのである。] ([Lucie Le Verrier; 1866/12/27 → Lejeune; 1993a:243] 括弧内は引用者)

このように、書かれたものとしての日記は、それが専ら私秘的な性格 [「ただ自分だけのために」「まさしく私の考える事だけを書き記すために」「ずっと後になってからそれを読み直すという目的のためだけに」] を帯びる場合でも、それ自体として、歴史的・社会的な関係＝機能に開かれている [「お決まりの義務になってしまう」][「自分以外の」誰一人としてそれを見てはならない][「いかなる第三者にも割り込んで欲しくない」] のであり、日記の書記行為もまた、それ自体として、親密性あるいは(何らかの意味での) 社会性 [「秘密を打ち明ける相手」「それ [=日記] と私との間」] を創出するための運動を内包しているのではないだろうか。

「内的日記」の中でしばしば繰り返し用いられる一つの比喩との関連で、この事を考えてみよう。日記を書き記す事を「自分自身の肖像画 *mon portrait*」を描く事であり、「自画像を描く *me peindre*」事であるとする比喩がそれだ ([Lejeune; 1993b])。実際に、日記を書き記す事は、しばしば「自画像を描く」事に喩えられる。

「自分の相対的な価値についての正確な観念を得るためには、歴史的・社会的に自分を眺め

る必要があり、自分がどんな人間であり、またはどんな人間でないかを知るためには、その全生涯、あるいは少なくともその生涯の一時期の全てを眺める必要がある。(…) 正確な肖像 *le portrait juste* を形作るためには、次々に起こるものを同時的なものに変え、統一のために、ばらばらになっている多数のものを捨て、変化していく現象から本質へと遡らねばならない。そもそも私の中には、時や場所、環境や場合に従って、十人もの人間がいる。私は動き易い様々な姿の中に、自分の姿を取り逃がしてしまうのだ (*je m'échappe dans ma diversité mobile*)。 (…) 私は自分がカメレオンであり、万華鏡であり、プロテウスであり、あらゆる方法によって変化し、両極へ走る事が出来、流動し、可能性を持ち、従って私の表明の中においてさえも潜在的であり、私の表現の中にさえもその姿を現さない事を感じている。(…) 私は私という存在のあらゆる小片、私という流れの全ての滴り、私という唯一の力のあらゆる光線が、逃げ去り、新しくなり、変わっていくのを感じている」 [Henri-Frédéric Amiel; 1866/03/05=1972:174-175] (強調は引用者)。

このような‘自画像’の比喩は、モデルと製作者と鑑賞者から成る関係性を想起させる。換言すれば、この比喩は、その日その日に変化する自己と、その変化に連れて招き寄せられる様々な出来事を書き記す自己自身と、それらを何処からか眺めている他者から成る関係性を想起させる。しかもそれは、その日その日における関係の中で自分がいかなる変化を遂げたのかを自分自身で描き出しながら、それを他者に向けて(再)表現する事を含んでいる。つまり‘自画像 *autoportrait*’の比喩は、それ自体として、自己を取り巻く関係性を想起させるのであ

り、しかもこの関係性は、これまでの社会性の痕跡・蓄積だけでなく、これから刷新・創出され得る社会性の事をも意味するのである。日記における‘自画像’は、「日記の運動」やそれを導く「相互作用」の中で姿を現すものとして理解されている。「『その都度形作られる』自画像は、日記の運動から切り離して捉えられるべきではない。なぜならば、それは絶えず、それに先行するものとそれに後続するものとの間の相互作用の中に置かれているからである」([Lejeune;op.cit.:239])。このような「日記の運動」や「相互作用」の存在が意味するのは、日記における‘自画像’の制作が、想像的な社会性——即ち、「他者の視線」が位置付けられる想像的な領域——の創出を伴うという事である。別様に言えば、「自画像を描く」とは、「そもそも自分よりも他者の方がよく知り得るもの」であり、且つ「ただ自分だけが決して直接的には知り得ないもの」を「他者に向けて表現する」逆説的な試みである以上、それは、この「表現」に対して先行する／後続するような「他者の視線」を自分自身の中に取り込む事を必要としているのである([ibid.])。尤も、‘自画像’の制作を支えるこの「視線」は、モデルと製作者との関係、あるいは制作物そのものを、製作者自身にとって曖昧なものにする事がある。

「この帳面は何と奇妙な帳面なのだろう(Quel singulier cahier que celui-ci.)。私は今それを読み返してみた。ところがそれは、私にとって他所他所しい(étranger)ものになってしまっていた。私の友人のJ.H.***は、他人を信頼すると共に、自制心のある人で、いつでもその本心がそっくりそのままの形でその手許に見い出せるようになっているのに反して、私ははみ

出したり波打ったりばらばらになったりしている人間で、自分の分子を集めるのに際限の無い骨折りをしなければならず、日毎の瞑想mes méditations quotidiennesに耽り内面の日記mon journal intimeを付けているにも拘らず、自分というものは絶えず自分自身から逃れ去っている(je m'échappe continuellement moi-même)。人格の凝集力が意志に在り、殊に意志作用の連続性に在るとするならば、自分は自分を連続させていく事が無いから、明らかに自分は多くの人格であって単一の人格では無いという事になるだろう」[Henri-Frédéric Amiel; 1866/11/12= 1972: 195-196] (強調は引用者)。

「奇妙な帳面」「私にとって他所他所しいもの」「自分の分子」「自分というものは絶えず自分自身から逃れ去っている」という記述からも分かるように、モデルと製作者との関係、あるいは制作物が捉えようとする「内的体験」とは、「そもそも不鮮明で流動的で曖昧なもの」である。しかし、それに対して「自画像」とは、「自己を構成するための手段、即ち、様々な——社会制度的／心理的／宗教的——枠組みとの関係で自己自身の位置を確定するための手段であり、自己に固有な存在を統御しているという感覚を獲得するための手段なのである」([Lejeune;op.cit.:239-240])。「内的体験」の曖昧性に対して、しばしばこのような意義を与えられるが故に、‘自画像’として産み出される自己の同一性は、「現在の同一性」よりもむしろ「未来の同一性une identité future」に関連するのであり、その意味で「投影的な次元dimension projective」を有する事になるのである([Lejeune; op.cit.: 240] 強調は原著者)。

日記における‘自画像’は「他者の視線」

を取り込む中で「その都度形作られる」。そしてこの「他者の視線」の存在が意味するのは、日記における内面性intimitéは、何らかの公開性や社会性を参照する中で形作られる、という事である。つまり、内的日記とは——それが実際には‘個室的な空間’で書き記されるものであるにも拘らず——、決して自己完結した営為ではなく、それ自体が想像的な社会性の創出を伴う営為として理解されるべきものである(8)。内的日記は「自分自身と交わす対話」であると共に、「他者の痕跡を留めるもの」であり、更には「他者に対して大いに開かれたジャンル」である事になる([Didier; op.cit.:22-23])。この事は、あらゆる内的日記が——それが実際に「交換日記」と呼ばれるか否かに関わらず——原理的には〈交換日記〉である事を意味している。それは私密的な場面で書き記されるにせよ、一定の他者性を前提にしているからであり、またその限りで、一定の交換可能性・公開性を前提にしているからである。内面性がそれとして創出されるのは、それが常に既に交換可能・公開可能な性格を与えられているからだ。「いくら『私的』だとは言え、友人たちとの会話が日記に記録され、作者の『自我』が副次的な位置を与えられる事も珍しくない」[Didier; op. cit.]。実際に、内的日記の中ではしばしば‘友人関係’が書き記されるのであり、日記そのものが一種の「打ち明け話の相手」として擬人化される形で、「擬似的な友人関係」[Gay; 1984:446-452]を構築しながら書き記される事も少なくない。

「親愛なる日記よCher journal、あなたは私自身をほんの束の間のあいだだけ見ているに過ぎないのだから、あなたには私自身の20分の1、否、100分の1でさえ見えていないのかも知れない。なぜなら、私はあなたの中に、私の日日の

思考や日日の印象のうち、100分の1でさえ書き記せているとは言えないのだから。[とはいえ、私にとって] あなたは〔私自身の〕全体を眺める眼une vue d'ensembleであり、少なくともその輪郭を通じて、私自身のいわゆる『等身大の肖像grande forme』を描き出してくれるものである。ここで正直に告白するavouer naïvementならば、私はまさにそれ故に、あなたを愛しているのであり、あなたに執着している。もし出来る事なら、私は人生最期の日まであなたを書き続けていきたいと思う。[そう出来るものと信じれば、] 私もあなたの中に悦びを見出す事になると思うから」([Claire Pic; 1865/12/06→Lejeune; 1993b:386])。

日記そのものに対する呼び掛け〔「親愛なる日記よ」〕や親称tuの使用、更にはそれに向けて「正直に告白する」事の無防備さからも分かるように、此処では、書き手と日記との間に親密な＝性愛的なintime関係が構築されている。書き手は自分の書き記す日記がやがては「全体を眺める眼」に、「私自身のいわゆる『等身大の肖像』」に成り得ると信じている。この信頼に基づいて、日記そのものに対する‘自己愛的な愛着’が表明される。即ち、書き手は日記を「愛している」事やそれに「執着している」事を、日記そのものに打ち明ける。そしてこの‘愛着’は「人生最期の日まで」引き延ばされる中で、書き手のうちに「悦び」を見出させるのである。

このように、内的日記を(潜在的／顕在的な)〈交換日記〉として捉え返すとき、そこに書き記される内容や表現には、一種の‘社交的’性格が賦与される事になる。日記を書き記す者は、単に自分自身のためだけに記録を残すのではなく、その読者＝相手との関係で選択された事柄

を、読者＝相手との関係で表現する。結果的に、交換の相手が誰であるかに応じて、いかなる他者として想定されるかに応じて、書き記される内容に関しても、また、表現に関しても、それぞれ異なった選択が為される事になる（[本田和子;1996:6]）。従って、内的日記の「内的」性格もまた、何らかの公開性や社会性との関連で捉え返される必要がある。

此处で注目すべきは、内的日記の「内的な」性格が、書記行為の主体の「内面性」とそれが伝達され受容される圏域としての「親密性」とを同時に意味する、という事だ。即ち、内的日記の‘内的なintime’性格は、‘内面性＝親密性intimité’の二重化された意味に照らして——親密な相手を宛先に書き記される事柄が‘内面性’を構成し、内面的な事柄の書き記される宛先が‘親密性’を構成する、という一種の循環的な関係に照らして——理解される必要があるのである⁽⁹⁾。このように捉え返された内的日記は、いかなる公開性や社会性を前提にしているのだろうか。内的日記の‘内面性’と‘親密性’とはいかにして関係し合うのだろうか。そこで以下では、この事を、内的日記が想定する‘秘密結社的’共同性との関連で考察する事にしたい。

V

内的日記をそれが想定する公開性や社会性との関連で捉え返す際に注目すべきなのは、それが一種の‘秘密結社的’共同性＝〈秘密の社会〉を創出するという事だ。この事を、相互に交換される、あるいは相互に交換される事を前提に記述される〈交換日記〉の角度から考えてみたい。この意味での〈交換日記〉が展開する場面では、内面性の形成が親密性の形成と支え合う

形で進行する事になるだろう。日記の書記行為を通じて内面性が展開される事は、その内面性が伝達され受容される親密性の領域を展開させる事にも繋がるからだ。

先にも述べたように、内的日記は決して自己完結的では有り得ない。それは少なくとも、自己完結性の不在証明としての「擬似的な他者関係」を必要とするのであり、それはしばしば内的日記の‘対話的’構造となって姿を現す。つまり、内的日記は‘自分自身との会話’、内的対話の構造⁽¹⁰⁾を保持する事になるのであり、それは例えば、次の引用からも明らかにみてとる事が出来る。

「私の日記は私自身との対話であり、私の社交場であり、私の道連れであり、私の腹心である。それはまた私の慰め、私の追憶、私の苦痛を癒す妙薬、私の木霊、私の密かな経験の貯蔵室、私の心理の道標、私の思考の錆止め、私の生きるための口実、要するに、私が遺産として残し得る唯一の有益なものである」（[Henri-Frédéric Amiel;1864/09/20→Hocke;op.cit.:20] 強調は原著者）。

此处では、‘日記が自己の分身になる’という感覚に並行する形で、日記がそれぞれ「私自身との対話」「私の社交場」「私が遺産として残し得る唯一の有益なもの」として捉え返されている。しかも〈対話〉〈社交場〉〈遺産〉といった比喻の系列からも分かるように、日記それ自体の公開性や社交性や社会性（の広がり）が、やや漠然とした、しかも唐突な比喻を伴う形ではあれ、先取されていると言える。但し、それらの関係性は——仮に日記そのものが「出版」される⁽¹¹⁾場合でさえ——決して無限に拡大しうるものでは有り得ない。少なくとも主体の想

像的な次元において、それは‘想定された読者’の空間として予め一定の制限を加えられたものであるからだ。そこで問題になるのは、各々の日記の書き手が、この‘想定された読者’の空間をいかなる広がりとして捉えていたか、また、書記行為との関連でこの空間にいかなる機能を賦与したのかを探る事である。此处では、一つの仮説を提示する事にしたい。それは、内的日記が何らかの他者性の空間を想定しながら書き記される際に、内的日記の「私性intimité」の‘本質’は、内面性から親密性への、あるいは親密性から内面性への、相互転換を伴う中で形作られたのではないか、という事である。

内的日記の書記行為がその断続的な繰り返しの通じて内面性を展開させる事——特に19世紀にしばしば姿を現す隠喩を用いるならば、「日変化する自画像を描き出す」事——は、それが伝達され受容される親密性の領域を展開させる事でもある。この親密性の領域は、具体的な宛先（例えば、「家族」や「友人」等）として指し示される場合もあれば、抽象的な宛先（例えば、「後代」や「親愛なる読者の皆様」等）として指し示される場合もある。しかしいずれの場合にも、宛先には予め一定の制限が加えられ、しばしば排他的な属性が与えられているのである。此处で、このような宛先の様態を「秘密結社société (ou association) secrète的」と呼ぶ事が出来るかも知れない（[Simmel; 1908= 1979] [本田和子; 1996]）。内的日記を構成する日常的な書記行為の場面でその都度想定されているのは、予め一定の制限を加えられた宛先=読者たちから成る一種の‘秘密結社的’共同性=〈秘密の社会〉である、と言えるのではないだろうか。

繰り返せば、内的日記の「内的」とは、日記において主題化される内面性を意味するのみな

らず、その内面性が理解可能・読解可能となるような親密性の領域をも意味する。つまり、‘内面性=親密性’の二重化は、日記が書き記され交換される、あるいは交換される事を想定しながら書き記される中で、一種の‘秘密結社的’共同性=〈秘密の社会〉が創出される事に基づいているのである。この擬似的な秘密結社は‘内面性の相互交換をその結合の本態とする、親密な他者たちから成る領域’として創造される事になるだろう。それは‘私秘化された事柄’を交換の対象とする限りで、また、その交換の拡大には予め一定の制限が加えられる——即ち、交換される領域と交換されない領域との区別が明確化される——限りで、「秘密的性格」を帯びる事になり、また、そのような事柄を交換の対象とし、自分からも相手からも相互に・対等に・双方向的にそのような事柄の交換が発動される限りで、「結社的性格」を帯びる事になる⁽¹²⁾。

交換日記——それは書簡の交換と機能的に等価である。但し、それは書簡の交換に比べて、排他的交通そのものを指向し、結果的にそれを実現する。——に従事する者たちが、書かれたものの交換という方法を選択するのは、それがまさに‘秘密結社的’交通を可能にするからである。「書かれた言葉は、発話される言葉のように、声が届くという形で公の空間内に漂っていく事をせず、それを手に取って読む者にしか意味を開示しないという特性を持っている。それ故に、私的に文書が交換される際には、往々にして、交換される者たちだけの間の事柄という閉じられた関係が出来上がるものである」([本田和子; 前掲書: 11頁])。文書の交換、あるいは実際に交換が行われるか否かに関わらず、文書が交換される事を前提に、交換可能なものとして書き記される場合には、書き手と読み手

との間には、「文書共同体」とも呼ぶべき「秘密結社」が形成されるのであり、以後、両者は「結社の同志としてその秘密を共有する」という新しい関係に立ち至るのである（[本田和子；同]）。日記が書かれたものの交換関係を想定しながら書き記される場合、その交換関係に関与する書き手と読み手は、それぞれ個別的には切り離された、しかし想像的な次元においては相互に結び合わされ得る者たちとして了解される事になる。それは書かれたものの限定的な開示、あるいは限定的に開示されるものとしての「秘密」や「私的な出来事」に見合う関係であると言える。この新しい関係を、此処では、「文書共同体」に倣って‘日記共同体’と呼ぶ事が出来るかも知れない。

このように、内的日記の実践を通じて、各人が各人の秘密、私的な出来事についての記述を交換し合う事によって成立するような‘私的な公共性’、各人の「秘密」が何らかの形で遣り取りされるような「結社」が形成される。但し、その公共性＝公開性は予め制限を加えられたものである⁽¹³⁾。ところで、この‘秘密結社的’共同性、‘私的な公共性’に対する感覚は、書かれたものの交換を巡る制御不可能性が強く意識されるに連れて、それだけ一層先鋭化する。「自分自身の突然の死」——このような仮定の措かれる事自体、常に既に、交換関係そのものの制御不可能性、交換関係における書き手の不在を想定している——に際して、書かれたものを「近親者」や「家族の者」に委ねる事の出来ない場合に、‘生前出版’が欲望され、その宛先もまた虚構化される事になる。

「もし突然、私が病気でこのまま死んでしまおうとしたら！（…）たとえ私が不治の病に冒されていたとしても家族の者は黙っているでしょ

うから、私は何も知らないまま、死を迎える事でしょう。そして私の引き出しの中を片付けていた人が日記mon journalを発見して、それを家族の者が読む事になるでしょう。でもその後は日記も処分され、そうなれば、もう私という人間が残したものは本当に何一つ…何一つ…何一つ無くなってしまう（rien...rien...rien!...）のです！私がいつも恐れているのはこの事なのです。大きな目標を掲げて悩んだり泣いたりもがいたりしながらこの世を生きても、最後には忘れられてしまうのです！…忘れられてしまう…（l'oubli!...l'oubli...）まるで私という人間がこの世に存在しなかったかのように。たとえこのまま有名になれないで死んでしまうにせよ、人間を科学的に研究しようとする者にとって、この日記は格好の研究材料になるでしょう。一方で読んでもらえる事を前提にしていながら、他方であたかも将来読まれる事など予想もしていないかのように、気取らずに日々書き綴られた、一人の女性の人生録la vie d'une femme。きっと興味深いと思います。この私に共感を覚えてくれる人もきっといるはずです。（…）私は全て、全て、全てをありのままに書きました（je dis tout, tout, tout.）。何を隠す必要があるでしょう。それはまもなく〔読者の皆様にも〕分かって頂ける事と思います…」[Marie Bashkirtseff; 1884/05/01→Lejeune;1993a:239]（強調・括弧内は引用者）。

この書き手は、「自分という人間の残したものが何一つ無くなってしまおう事」や「自分という人間が最後には忘れられてしまおう事」を繰り返し恐れる中で——裏返して言えば、‘自分という人間の何らかの痕跡が残る事’や‘自分という人間が何らかの形で記憶され続ける事’を繰り返し願う中で——「読んでもらえる事を前

提にしていながら」同時に「あたかも将来読まれる事など予想もしていないかのように」書き綴られたこの「日記」あるいは「人生録」を、「興味深いものと思い」、それに対して「共感を覚えてくれる」人も「きっといるはず」だと確信している。此処で、書き手のうちにこのような確信を産み出しているのは、日記的な書記行為とそれが常に既に組み込まれた、書かれたものの交換関係——この場合に、「生前に出版する事」〔「もし突然、私がこのまま（…）死んでしまうとしたら…」〕はこの交換関係から導き出された一つの効果に過ぎない——の世界であり、その世界を構成する‘秘密結社的’共同性なのである。

このように、内的日記の書き手たちにとって、それが公開される宛先、伝達され受容される宛先は、多かれ少なかれ‘秘密結社的’共同性＝〈秘密の社会〉として想像的に構築されている。自分自身の内面的な打ち明け話に耳を傾けてくれるような、‘親密な相手・親友confident(e)’が想像され信頼される。この想像に基づく信頼に支えられる形で日記を書き記したり、日記を開示したり、日記を交換したり、日記を出版したりする事が繰り返し行われてきたのである。

VI

以上の考察を通じて、本稿が明らかにしようとしたのは、近代フランスにおける日記的な書記（行為）、特に‘内的日記’の書記（行為）が、専ら内面性を創出するためだけの運動ではなく、同時に共同性や社会性を創出するための運動でもあった、という事である。ルソーがその日記的な書記（行為）の中で到達しようとした〈孤独〉は、それ自体が‘普遍的な価値の発生源としての自我’（〔Goldschmidt; 1978〕）、社

会性の〈零度〉として捉え返す事のできるものだ。「ルソーは普遍の名の下に正当性を備えながら〔自己を〕語る事の出来るために、孤独の中に自己を据える。（…）透明性の擁護者になる〔彼の〕運動は、同じく彼をして放浪者たらしめる運動である。（…）彼は全体的な透明性と直接的な交流とを夢想するが故に、（…）混乱した社会に彼自身を結び付ける全ての絆を断ち切ろうとする」（〔Starobinski; 1957= 1993: 67, 68, 70〕括弧内は引用者）。従って、逆説的にも、日記的な書記（行為）＝‘夢想’の運動が目指す「孤独の最も深い場所」で、ルソーはその「反抗心」と「反社会的な情熱」によって再び〈社会〉に結び付けられる事になる。まさに「攻撃的である事は執着」なのだ（〔ibid.〕）。これに対して、19世紀の‘内的日記’の書き手たちにとっての「孤独」とは、書かれたものの交換関係が積極的な意義を持つようになる事⁽¹⁴⁾に伴い、幻想の共同性phantom community、即ち、‘書かれたものの交換による局所的・媒介的な交通’（〔Ong; 1982=1991:212-215〕）の中で、その都度虚構化される社会（像）を浮かび上がらせるものである。日記的な書記（行為）は、‘親密性・内面性’の空間、〈室内l'intérieur〉に象徴される〈私の空間chez moi〉（〔Derrida / Stiegler; 1996〕）から出発しながらも、そこから完全には離脱しない形で／そこへは完全には回帰しない形で、自分自身との対話や（書かれたものの交換が想定される場合には）他者との‘想像上の’対話、あるいは（書かれたものが実際に交換される場合には）他者との‘事実上の’対話を繰り返す事になるのだが、これらの過程では常に既に、一種の‘秘密結社的’共同性が創出されつつある、と言えるだろう。

註

- (1) 従来のフランスにおける社会史的研究の中で、日記的・自伝的な書記（行為）に対してその「遂行的性格」にまで検討を加えたものとしては〔Goulemot;1981〕〔Roche;1982〕〔Hébrard; 1985=1992: 29-83〕を挙げる事が出来るだろう。但し、その遂行性から引き起こされるはずの効果は、一定の‘歴史的・社会的文脈’を前提にしなければ把握出来ないものである。
- (2) 但し、このような把握の仕方は、内的日記の担い手となる「社会的に限定された」集団や記述者の「帰属集団」の存在を先取するものとなっている。また、内的日記の内容や表現がこれらの集団性や社会性との関連で決定される可能性、あるいは、内的日記の内容や表現との関連で集団性や社会性そのものが創造される可能性については一切考慮・検討されていない。
- (3) 尤も、こうした検討作業には、次のような留保が付け加えられる。「このような資料によって各人は感情の表象や活用を過大評価する傾向があるし、自分自身の知覚や印象や感動などにあえて耳を傾ける人たち、そしてそれが出来る人たちに固有の感受性の形態を過大評価する傾向がある。しかも先に挙げた〔内的日記という〕資料は、分散した断片的なデータであり、数量化する事の明らかに困難なデータしかもたらさない」〔Corbin;ibid.〕。
- (4) そのジャンル特性を相対化するために、「自伝」との対比から「内的日記」の操作的な定義を試みる事も出来るだろう。例えば、ジョルジュ・ギュストルフは、「私的な日記」と「自伝」との違いに関して次のように述べている。「私的な日記private journalの作者は、その日その日に自分の印象や精神状態を記述しながら、連続性に対するいかなる配慮も無しに、日日の現実the portrait of daily realityを描き出す。これと反対に、自伝〔の作者〕は、時を貫いて、自己をその統一性と同一性において

- 再構成するために、自分自身に対して距離を保持する事を要求する」〔Gusdorf;1956→1980= 1979: 271〕強調は引用者）。但し、この定義は若干修正されなければならない。というのも、「内的日記」のジャンル特性に照らせば、「自伝」と「私的な日記」との違いは、連続性それ自体の有無にではなく、連続性を構成する様式上の差に求められなければならないからだ。「慎重な手続きさえ踏むのであれば、自伝の中では『物語』を構成する事が出来る。自伝とは、事後的に再構成された物語である。従って〔自伝の場合には〕、語られる事柄に対して、それらが『その日その日』に記録される〔日記の〕場合には獲得する事の出来ないような『論理』を与える事が出来る。なぜならば、それらは事後的に、多少とも距離を措いて構成されるものであるからだ」〔Didier;op.cit.:180〕。このような「物語の論理」は、日記の中には存在しない。従って、「自伝」と「内的日記」との違いは、前者が（書記行為の転位した）物語（行為）の連続性に依拠するのに対して、後者が専ら書記行為の連続性——実際には、書記行為における「日日の継続性や反復性」と「記述の断片性や不連続性」との逆説的な結合〔Didier; op.cit.:37-38〕——に依拠する点に求められなければならない。しかし、「内的日記」のこの（修正された）定義は、書記を書記行為に従属させ、書記行為を線形的な時間性に従属させる点で、依然として批判的検討の余地を残している。
- (5) 更に言えば、このような書記行為の逸脱的な運動は、後続する歴史的空間、「内的日記」の空間の中でいかなる再解釈を施される事になったのか、いかなる内面性や社会性を創出するものとして一定の意義を与えられる事になったのか。
 - (6) 確かに、「日記を付ける」事が「経験したり考えたりした事を毎日ノートする事」を意味するのだとすれば、多くの日記の書き手たちは「毎日付ける」というこの規律を自分自身に対して免除する。

この規律は、極めて多くの場合に、日記の書き手たちを『今日は特に書き記す事はない』という滑稽な記述や『今日はこの文を書いた』という自己言及的な最小限度の記述に追い遣る事になる。この規律が要請する「日記の厳密に継続的で絶え間のない書記行為」はそもそも実現不可能なのである。しかしながら、「日記の書き手を定義するのは、その実践の継続性というよりも、むしろその企図の継続性なのである」([Genette; 1981=1985: 171-172])。更に言えば、「日記の書き手 diarist」を特徴づけるのは、「企図の継続性」と相互に支え合う形での、「(自分自身をも含めた)日記の書き手の態度を疑問視しない」態度であり、「日記主義 diarism」を自明視する態度である。「日記の書き手の真なる特徴は、彼が一般的な日記の書き手の実践の正当性を疑問視しない事、少なくとも特に自分自身の実践の正当性を疑問視しない事である。彼は日記をつけることを一時的に、更には決定的に止めるかもしれない。しかし、だからといって過去の実践を正当なものと思ふ事を止めたりはしない。要するに、日記の書き手とは、日記を付ける人の事を意味するよりも、日記の徳性を信じる人の事を意味する。更に論を進めて言えば(…)、日記主義[日記を付ける事]を一つの活動としてではなく、一つの見解あるいは確信として定義する事が出来るかも知れない。つまり、日記の徳性を信じて疑わない見解あるいは確信としてである」([Genette; op.cit.:173] 強調は原著者)。つまり、線形的な時間性の遵守という規律に従う中で「日記の厳密に継続的で絶え間のない書記行為」を実現する事が不可能である場合でも、「日記の徳性」が信じて疑われなければ、また、「日記主義」が「一つの見解あるいは確信」として保持されていれば、規律そのものの効果はやはり発揮される事になる訳である。

(7) 但し、内的日記の運動に関して、此処で併せて

指摘しておかなければならないのは、「その運動が深化すれば深化するほど、それは抽象作用の非人称性に接近する」([Blanchot; op.cit.:373])という事である。例えば、アミエルの『日記』(1846-81)においてはしばしば、自分自身に関する、日付を与えられた覚え書きが、その内面的な性格を強めれば強めるほど、次第に一般的な様々な考察、哲学的・倫理的な考察に置き換えられる傾向がみられる。また、(同時代の)宗教的な日記においてもしばしば、神秘的な打明話が、熱烈な体験であればあるほど、その記述は次第に抽象性の度合いを高める事になる。即ち、このような経験は「非人称的・間接的に」しか語られない([ibid.])のである。内的日記をしばしば特徴づける、この「抽象作用の非人称性」に対する接近がいかなる関係性の構想を含み込むものであるのかに関してはそれぞれの記述に即して、その都度検討される必要があるだろう。

(8) 自分自身に対する距離化、日記の読者あるいは宛先、自分からは相対的に独立したものとして、一種の蓄積された〈資本〉として姿を現す日記([Didier; op.cit.])。これらはいずれも、日記の執筆が想像的な社会性の創出を伴うものである事を意味している。

(9) 此処では、intimitéの語彙に媒介された内面性と親密性との関係を、次のように捉えておく事にしたい。即ち、内面性を書き記す事は‘親密な’相手を選択的に招き寄せる事になる——それは、後にみるように、書かれたものの交換関係を想定するからだ——が、実際には、親密な相手を招き寄せる中で‘内面性を書き記す事’が遂行される。換言すれば、内面的な事柄を書き記す中で、他者との関係を‘親密な’それに書き換える事が出来、また逆に、親密な関係を踏まえる中で、自分自身の‘内面的な’事柄を書き記す事が出来る。このように、‘親密な’空間を創出するためには内面的

な事柄を書き記さねばならず、‘内面的な’事柄を書き記すためには親密な（読者）空間を前提にしなければならない。この場合に、内面性の書記（行為）は、その前提となるはずの‘親密な’空間をいわば遂行的に産出するのであり、その過程で「内面性のエクリチュール」が展開される事になるのである。

(10) ウォルター・オングによれば、書き手が想定する聴衆 [= 読者] とは常に既に虚構化された存在である。書き手はその場に不在であり、大抵の場合には会った事もない、読者の演じる役柄を自分から演じなければならず、その事を通じて読者（との関係）を虚構化しなければならない。「私的な日記」の対話的構造は、この虚構化をいわば典型的な形で呈示する。「自分に向けて書かれる私的な日記においてさえ、私は相手 [としての自分] を虚構しなければならない。実際、日記の場合には、或る意味で、話し手とその話の受け手とを最大限に虚構する事が必要になる。書く事は、つねに一種の話の真似事 *imitation talking* である。従って、日記の中で、私は自分自身に話し掛けている [独り言を言っている] ようなふりをしている訳だ。しかし実際にこんなふうに私が自分に話し掛ける事は決してない。それに、もし書くという事がなかったら、あるいは、実際のところ、印刷というものがなかったら、そんなふうに自分に話し掛ける事は出来なかっただろう。(…)『私的な日記』というものが意味するのは、言葉に言い表された一種の独我論的な夢想であり、それは、印刷文化によって形作られた意識の産物なのである」([Ong; 1982=1991:212-213] 括弧内は訳者)。このように、内的日記の中からは、確かに「一種の話の真似事」や「自分自身に話し掛けているようなふり」をみてとる事が出来、しかもそれらは書く事から派生し得るに違いない。しかし、「私的な日記」にみられる「一種の独我論的な夢想」を、「印

刷文化によって形作られた意識の産物」であると切り切るのはいは「印刷文化」と「印刷技術」との間に差がある事は無論認めるにせよ——やはり技術決定論的である。それとは逆に、書く事から派生し得るこの「独我論的な夢想」が「印刷文化」を積極的に活用し、自ずからそれを招き寄せてきたと捉える事も可能ではないだろうか。

(11) 実際に、19世紀末になると、日記の‘生前出版’が増加するようになる。尤も、此处での問題関心は、日記が実際に書き手の生前に出版されるか否かという事よりも、‘生前出版’そのものを可能にする、‘生前出版’そのものを欲望させるような歴史的・社会的諸条件を探る事にある。

(12) 但し、精確には、それは擬似的な秘密結社である。理念型的な「秘密結社」とは異なり、此处で考察の対象となっている〈交換日記〉の場合には、その秘密が公開される領域=結社の領域が結社それ自体の内部に対しても外部に対してもしばしば可視的であるからだ。理念型的な「秘密結社」の場合には、結社そのものが、その領域の内部に対しても外部に対しても等しく不可視化されたものとして絶えず維持される事になる。

(13) 日記はいかなる共同性との関連を持ち、またそれ自体としていかなる共同性を創出する事になるのだろうか。実際に、19世紀における内的日記の実践がしばしば「伝染的实践」になり「集団的实践」として遂行された事実は注目し得る([Didier; op.cit.:49-50] [Lejeune; op.cit.])。また、日記の執筆がしばしば書簡の交換に付随する形で行われた事も同じく注目し得る。「その日その日に」執筆される日記は、やはり同じく「その日その日に」交換されるであろう書簡に転換し得るものとして了解されていた可能性がある。19世紀の若い女性たちが残した「草稿・略画 *croquis*」や「自画像 *autoportrait*」の数々は、内的日記の断片であると同時に、身近な友人に宛てられた手紙の下

書きとしての体裁を採っており、一種の〈準書簡〉と見做す事が出来る ([Lejeune;op.cit.:151-290])。特に友人関係を前提とした書簡や日記の場合、両者の関係はしばしば曖昧に成り得た。それらの書記(行為)に共通する反復性や継続性、更にはこれらの性格を通じて展開される、親密性と内面性との一種の相互触発が、書簡と日記との相互転換を促したと言える。

- (14) 「書く事は独我論的solipsistic作業である」「書き手が想定する聴衆 [=読者] とは、常に既に虚構化された存在である」 ([Ong; 1982= 1991:211,212]) といった指摘や、「聴取する公衆hearing publicから読書する公衆reading publicへの移行」即ち「共同体的連帯communal solidarityから互いに切り離された単位を束ねる事でその都度想像=創造される社会society as “a bundle of discrete units” への移行」

といった指摘 ([Eisenstein; 1979:(1):132-133]) における、書記(行為)や書物を巡る変化のメディア論的な把握とそこに前提として含み込まれる技術決定論。確かに、書記(行為)や書物の価値が変化する事は、社会像の変化と無関係ではない。ルソーにおける「透明な交流の空間」としての〈社会〉は、書かれたものécritureの不透明性に体现された、交通の局所性や媒介性を「執拗に攻撃する」中で構想された ([Derrida;1967=1972])。しかし、此処で主張しておきたいのは次の事である。即ち、書記(行為)や書物の意義が変化する事、書記(行為)の中での書記(行為)そのものの担い手の位置である「言説の審級」が変化する事が、むしろメディア論的に記述される変化をその派生的な効果として産み出してきたのであり、決してその逆ではないという事である。

参考文献 (*邦訳は文脈に応じて多少改めた)

Rousseau, Jean-Jacques (1782→1959) *Les rêveries du promeneur solitaire, Œuvres complètes I*, Paris; La Pléiade. = (1960) 今野一雄(訳)『孤独な散歩者の夢想』(岩波文庫)、東京; 岩波書店。

Amiel, Henri-Frédéric (1883-1884→1911) *Fragments d'un journal intime* (précédés d'une étude par Edmond Scherer) [Tome1-2 : onzième édition], Genève : Georg & Clibraires-éditeurs. ; (1923) *Fragments d'un journal intime : 1846-1881* (présenté par Bernard Bouvier), Genève. = (1972) 河野与一(訳)『アミエルの日記(全4冊)』(岩波文庫)、東京; 岩波書店。

Pic, Claire (Fragments d'un journal présentés par Philippe Lejeune, *Le Moi des Demoiselles*, Éditions du Seuil.)

Le Verrier, Lucie (Fragments d'un journal présentés par Philippe Lejeune, 'Le je des jeunes filles' in *Poétique* (94), Paris; Éditions du Seuil. ; *Le Moi des Demoiselles*, Éditions du Seuil.)

Bashkirtseff, Marie (Préface de Journal présenté par Philippe Lejeune, 'Le je des jeunes filles' in *Poétique* (94), Paris; Éditions du Seuil. ; *Le Moi des Demoiselles*, Éditions du Seuil.)

*

Barthes, Roland (1966→1984) 'Écrire, verbe intransitif?' in *Le bruissement de la langue : Essais critiques IV* (Points : Essais 258), Paris; Éditions du Seuil, 21-32pp.= (1984) 花輪光(訳)「書くは自動詞か?」『言語のざわめき』、東京; みすず書房、19-35頁。

———— (1967→1984) 'Le discours de l'histoire' in *Le bruissement de la langue*, 163-178pp.= (1984) 花輪光(訳)「歴史の言説」『言語のざわめき』、164-183頁。

- (1968→1984) 'L'effet de réel' in *Le bruissement de la langue*. 179-187pp.= (1984) 花輪光(訳)「現実効果」『言語のざわめき』、184-195頁.
- Blanchot, Maurice (1959) *Le livre à venir*, Éditions Gallimard. = (1989) 栗津則雄(訳)『来るべき書物』、東京; 筑摩書房.
- Bretonneau, Gisèle (1977) *Stoïcisme et valeurs chez Jean-Jacques Rousseau*, Paris; Société d'Édition D'Enseignement Supérieur.
- Cassirer, Ernst (1932) *Das Problem Jean-Jacques Rousseau*, in *Archiv für Geschichte der Philosophie* (Vol.XLI), pp.177-213; 479-513.; =(Marc B.de Launay (trad.) / préface de Jean Starobinski) (1987) *Le problème Jean-Jacques Rousseau* (Textes du XX^e siècle), Paris; Hachette. ; =(1974→1997) 生松敬三(訳)『ジャン=ジャック・ルソール問題』(みすずライブラリー)、東京; みすず書房.
- Corbin, Alain (1990→1991) 'Histoire et Anthropologie sensorielle' in *Le Temps, le Desir et l'Horreur : Essais sur le X IX^e siècle* (Flammarion : Champs 409), Paris; Éditions Aubier, 227-244pp.= (1993) 小倉孝誠(他訳)「歴史学と感覚の人類学」『時間・欲望・恐怖: 歴史学と感覚の人類学』、東京; 藤原書店、267-285頁.
- Derrida, Jacques (1967) *De la grammatologie*, Paris; Les Éditions de Minuit. = (1972) 足立和浩(訳)『根源の彼方へ: グラマトロジーについて(上・下)』、東京; 現代思潮社.
- Derrida, Jacques / Stiegler, Bernard (1996) *Échographies de la télévision : Entretiens filmés* (collection Débats), Paris; Éditions Galilée / Institut national de l'audiovisuel.
- Didier, Béatrice (1976) *Le journal intime*, Paris; Press Universitaire de France. = (1987) 西川長夫(他訳)『日記論』、京都; 松籟社.
- Eisenstein, Elizabeth (1979) *The Printing Press as an Agent of Change : Communications and cultural transformations in early-modern Europe* (vol.1-2), Cambridge; Cambridge University Press.
- Foucault, Michel (1976) *L'Histoire de la sexualité I ; La volonté de savoir*, Paris; Éditions Gallimard. = (1986) 渡邊守章(訳)『性の歴史 I : 知への意志』、東京; 新潮社.
- Gay, Peter (1984) *Education of the Senses (The Bourgeois Experience : Victoria to Freud* (vol.1)), New York and Oxford; Oxford University Press.
- Genette, Gérard (1981) 'Le journal, l'anti journal' in *Poétique* (47), Paris; Éditions du Seuil. 315-322pp.= (1985) 吉田好克(訳)「日記、反日記」、『現代詩手帖: ロラン・バルト』(1985年12月臨時増刊)、東京; 思潮社、169-177頁.
- Girard, Alain (1963) *Le Journal intime et la Notion de personne* (Bibliothèque de philosophie contemporaine), Paris; Presses Universitaires de France.
- Goldschmidt, Georges-Arthur (1978) *Jean-Jacques Rousseau ou l'esprit de solitude*, Paris; Éditions Phébus.
- Goulemot, Jean Marie (1981) 'Introduction' in *Valentin Jameray-Duval : Mémoires : Enfance et éducation d'un paysan au XVIII^e siècle* (présentés par Jean Marie Goulemot), Paris; le sycamore, 22-108pp.
- Gusdorf, Georges (1948) *La Découverte de soi* (Bibliothèque de philosophie contemporaine : psychologie et sociologie), Paris; Presses Universitaires de France.
- (1956) "Conditions et limites de l'autobiographie," Reichenkron, Günther und Hasse, Erich (ed.) *Formen der Selbstdarstellung : Analekten zu einer Geschite des literarischen Selbstportraits* (Festgabe für Fritz Neubert) → (1980) "Conditions and Limits of Autobiography," in Olney, James (ed.) *Autobiography : Essays Theoretical and*

- Critical*, Princeton ; Princeton UP.= (1979) 湊野ゆり子(訳)「自伝の条件と限界」『現代思想：臨時増刊・総特集＝ルソー』7(16):267-279頁.
- Hébrard, Jean (1985) 'L'autodidaxie exemplaire : Comment Jameroy-Duval apprit-il à lire?' in (Sous la direction de Roger Chartier) *Pratiques de la lecture* (Petit Bibliothèque Payot · 167), Paris; Éditions Rivages, 29-76pp.= (1992) 泉利明(訳)「ヴァランタン・ジャムレ＝デュヴァルはいかにして読むことを学んだか——独学の模範例」、ロジェ・シャルチエ(編)水林章(他訳)『書物から読書へ』、東京;みすず書房, 29-83頁.
- Hocke, Gustav René (1963) *Das Europäische Tagebuch : Beiträge zur vergleichenden Literaturgeschichte*, Wiesbaden; Limes Verlag. → (1991) *Europäische Tagebücher aus vier Jahrhunderten : Motive und Anthologie*, Frankfurt am Main; Fischer Taschenbuch Verlag. = (1991) 石丸昭二(他訳)『ヨーロッパの日記(第I部・第II部)』(叢書・ウニベルシタス300)、東京:法政大学出版局.
- 本田和子(1996)『交換日記:少女たちの秘密のプレイランド』、東京;岩波書店.
- Lejeune, Philippe (1993a) 'Le je des jeunes filles' in *Poétique* (94), Paris; Éditions du Seuil, 229-251pp.= (1996) Martine Breillac (trans.) 'The "Journal de Jeune Fille" in Nineteenth-Century France' in (Suzanne L.Bunkers and Cynthia A.Huff (ed.)) *Inscribing the Daily : Critical Essays on Women's Diaries*, Amherst; University of Massachusetts Press, 107-122pp.
- (1993b) *Le Moi des Demoiselles : Enquête sur le journal de jeune fille*, Paris; Éditions du Seuil.
- Marshall, David (1988) *The Surprising Effects of Sympathy : Marivaux, Diderot, Rousseau, and Mary Shelly*, Chicago and London; The University of Chicago Press.
- Nussbaum, Felicity A. (1988) 'Toward Conceptualizing Diary' in (James Olney(ed.)) *Studies in Autobiography*, New York / Oxford; Oxford University Press, 128-140pp.
- Ong, Walter (1982) *Orality and Literacy : The Technologizing of the World.*; Methuen. = (1991) 桜井直文(他訳)『声の文化と文字の文化』、東京;藤原書店.
- Raymond, Marcel (1962) *Jean-Jacques Rousseau : la quête de soi et la rêverie*, Paris; Librairie José Corti. = (1990) 松本真一郎(訳)『ジャン＝ジャック・ルソー:自己探求と夢想』、東京;国文社.
- Roche, Daniel (1982) 'L'autobiographie d'un homme du peuple' in *Journal de ma vie : Jacques-Louis Ménétra : Compagnon vitrier au 18e siècle* (présenté par Daniel Roche), Paris; Montalba, 7-26pp.
- Rousset, Jean (1983) 'Le journal intime, texte sans destinataire?' in *Poétique* (56), Paris; Éditions du Seuil, 435-443pp.
- Simmel, Georg (1908) 'Das Geheimnis und die geheime Gesellschaft' in *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Dunker & Humblot. = (1979) 居安正(訳)『秘密の社会学』、京都;世界思想社.
- Starobinski, Jean (1957→1971) *Jean-Jacques Rousseau; La transparence et l'obstacle* (suivi de sept essais sur Rousseau), Paris; Éditions Gallimard. = (1973→1993) 山路昭(訳)『ルソー:透明と障害』、東京;みすず書房.
- Vincent-Buffault, Anne (1986) *Histoire des larmes : XVIII^e-XIX^e siècles*, Paris : Éditions Rivages. = (1994) 持田明子(訳)『涙の歴史』、東京;藤原書店.
- (1995) *L'exercice de l'amitié : pour une histoire des pratiques amicales aux XVIII^e et XIX^e siècles*, Paris; Éditions du Seuil.

(かつらやま やすお)